

一八八三年十二月十七日(月)

人生の目的は神を見ること——方法は愛

次の日の月曜日、午前八時ころであった。タクールは例の部屋に坐っておられる。ラカール、ラトゥ等、信者たちも部屋のなかにいる。モニは床の上に坐っている。医師のマドゥ先生も来ていた。彼は小ベッドの上のつかつて、タクールのすぐ横に坐っている。マドゥ先生は相当な年配のよく出来た人柄である。タクールが病氣にかかると、たいていこの人が来て診てくれるのである。たいそうユーモラスな人物だ。

モニは部屋に入ってきて師にご挨拶フランドムしてから、座について坐っていた。

聖ラーマクリシユナはモニに向かつておっしゃる——

「大事なことはこれだ——サッチダーナンダを愛することだ」

〔タクール、シーターの姿を見る——ガウリー・パンディットのこと〕

「どんな様子の愛だろう？ 神様をどんなふう好きになつたらいいのだろうか？ ガウリーがよく言っていたが、ラーマを知ろうと思えばシーターのようにならなけりやならぬ。バガヴァン(シヴァ大

神を知りたければ、バガヴァティー（シヴァの妻カーリー）のように——。バガヴァティーがシヴァのために厳しい苦行をしなすつたように、あんなふうに苦行もしなけりやならぬ。プルシヤが知りたければプラクリティの態度を取る必要がある——つまり、女友達か侍女か母親の態度だ。

わたしはシーターの姿を見たことがある。心の全部をラーマに捧げていたよ。性器にも手にも足にも、ドレスやそのほか身を飾るものにも、何一つ関心が無い。全身全霊がラーマへの想いでいっぱいだった。ラーマなしには——ラーマに出会わずには、生命の炎も消えるように見えた！」

モニ「ほんとにその通りでございます。狂女のようになっていたのですね」

聖ラーマクリシュナ「気違い女！——ソレだ。神をつかみかかったら気違いにならなけりや——。女と金のことを思っているようじゃ到底ダメだよ。女と性交する——あんなことが嬉しいのか！ 神を覚さとることができたら、性交の欲びの千万倍もの歓喜だよ。ガウリーが言っていたが、マハーバーヴァの境地では、体にある穴全部——肌の毛穴に至るまで、大きな女性器になつてしまふ。その数知れぬ穴の一つ一つが、アートマンとの交接の欲びを味わうんだ」

〔ブールナ、ジュエーニ、グル完全な智者が師の資格〕

聖ラーマクリシュナ「夢中になつて、一心不乱にあの御方を呼ばなけりやいけない。師匠ヅルの言うことをよく聞いて、その通りに実行しなければいけない。どうしたらあの御方が覚さとれるか教えてくれるから——。

グルは、自分が完全な智者であれば、弟子に道を示してやることができる。

完全智を得たら欲望はなくなる——五つの子供のような性質になる。ダツタトレーヤやジャダバラタ——こうした智者たちも子供のような性質になった」

モニ「そうでございますね。その人たちはよく知られています。ほかに、彼等と同じような智者が世間に知られずに大ぜいおりました」

聖ラーマクリシュナ「ハイ！ その通り。賢者はあらゆる欲望から解放されている。何か残っていると、何の害にもならない。賢者の石に触った剣は黄金に変わってしまうから——。もう、その剣で殺したり傷つけたりは出来ない。それと同じように、智者の愛欲や怒りは、ただ見かけ、マネのようなものとしては残っている。名前だけのものだ。あつても何の障りにもならない」

モニ「はい、あなた様がおっしゃいますように、智者は三つのグナを超越しています。サットヴァ、ラジャス、タマスのどれにも支配されません。これらは三人とも、盗賊でございますから——」

聖ラーマクリシュナ「それを、よくよく理解しなけりやいけないよ」

モニ「完全智を得た人は、世界中でせいぜい三人か四人くらいではないでしょうか」

聖ラーマクリシュナ「どうして、西の方の僧院には大ぜいの聖者や出家修道者がいるよ」

モニ「はあ、でもあの程度の出家でしたら、私にでもなれると思います！」

聖ラーマクリシュナはこの言葉を聞くと、しばらくモニの顔をジッと見つめておられた。やがて——  
聖ラーマクリシュナ「(モニに向かつて) 何もかも捨ててかい？」

モニ「マーヤーから解放されなければ、どうにもなりませんでしょう？ マーヤーを克服しなければ、ただ出家したただけではどうにもなりませんでしょう？」

皆、しばらくそのまま沈黙していた。

〔三グナを超越した信者は子供のようになる〕

モニ「あのう、三グナを超越した信仰とはどのようなものでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「その信仰ができると、あらゆるものがチンモイ霊（意識）にみえる。チンモイ霊であるシヤーマ、チンモイ霊の住居、信者もチンモイ霊、何もかもすべてチンモイ霊、こういう信仰を持てる人はごく僅かだ」

マドウ先生「はっはっはっは。三グナを越えた信仰か。つまり信者は、どのグナにも取りつかれちゃいけない」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハハ。そう、そう！ 五つの子供みたいだね——どのグナにも支配されない」

昼食の後、タクール、聖ラーマクリシュナは少しお休みになった。やがて、マニラル・マリツク氏が入ってきてごあいさつされ、床に座を組んで坐った。モニも床に坐っている。タクールは横になったまま、マニラル・マリツクと時々言葉を交わしていらつしやる。

マニ・マリツク「あなた様、ケーシヤブ・センに会いにおいででございましたな」

聖ラーマクリシュナ「うん、今、どんな具合だろうね？」

マニ・マリツク「ちつとも快方に向かつておりませんです」

聖ラーマクリシュナ「たいそうラジャス的だということがわかった——長いこと待たされて、そのあとでやっと会えた」

タクールは起き上がってお坐りになり、信者たちと話をなさる。

〔自ら語られるタクールの生涯——ッラーマ、ラーマと口走つて氣違ひのようになる〕

モニに向かつておっしゃる——

「わたしは、ッラーマ、ラーマと言いながら、氣違ひのようになったことがある。ある坊さんからもらつたラームラーラの像を抱いてはうろついていた。その像を沐浴させたり、食べさせたり、寝かしつけたりしていた。どこへ行くにも抱いて行つた。ッラームラーラ、ラームラーラと言つては、氣違ひのようになつていったつけ」(訳註、ラームラーラ——一八六四年に南<sup>ドゥッケーネンシヨル</sup>神寺院にやつて来たジャタダーリーという修行者からもらつた幼児ラーマの像)